

学校番号	24	学 校 名	静岡県立伊豆の国特別支援学校	校 長 名	松本仁美
------	----	-------	----------------	-------	------

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	自己 評価	関係者 評 価	意見
安全・安心①	児童生徒が安全に安心して生活できる学習環境の整備や危機管理体制を構築する。	緊急時や災害時の職員の役割や動きを理解し、適切に対応できた。	A	A	・地域との連携は必要不可欠であり、児童生徒の特性を多くの方々に理解して頂く取り組みがあると良い。 ・地域との合同訓練が楽しみです。 ・「適切に対応できた」の具体例をしりたい。
		児童生徒が自分で身を守るための安全教育を実施した。	A	A	・「実施した」の次の目標として、重度の子どもたちにどのように「安全教育」をするのか、貴学だけでなく、課題であると思う。
		校舎内や地域の危険場所の確認や改善を行う K Y（危険予知）ミーティングを、各学期初めに全職員縦割りで年 3 回実施した。	A	A	・平常時において、各職員が臨機応援に行動するための訓練（K Y ミーティング）は大切である。一方、災害時に対策本部棟を設置するうえで、指揮命令伝達の為の本部運営訓練の実施を検討してはどうか。 ・K Y ミーティングが縦割りで実施することにより、同一学部では見落としがちな箇所の確認ができていると判断する。
		安全点検を実施後の対応を 100% 実施した。	A	A	・ヒヤリハット事例では、保護者への丁寧な説明や迅速な対応が基本であり、引き続き安全点検の強化をお願いしたい。 ・ヒヤリハット事例の検討の継続を期待する。
安全・安心②	児童生徒一人一人の人権が尊重され、いきいきと活躍できる教育活動を実施する。	学部会でミニ人権講座を実施した。	A	A	・小グループでの意見交換は、全ての職員さんが意見を出せる雰囲気づくりができ、実効性の高い情報の共有が可能だと思われる。 ・職員の人権感覚を養うことは不祥事を防止する上でも大切なことと思う。実施率 90% の評価はマンネリ化しているのではと思われる。月 1 回の実施はマンネリ化を助長するので要検討。 ・「チェックが形骸化しない工夫や項目の見直し…」は、定期的に必要だと思われる。 ・地域とのかかわりでどのようなことをするとよいか知りたい。 ・研修やチェックの形骸化への対策を具体的に検討したい。
		3 分間セルフチェックで毎月、人権感覚チェックを実施した。	A	A	

様式第 5 号

		児童生徒一人一人に合ったコミュニケーション方法を学年や学部で共有した。専門家による指導助言を年 2 回、夏季研修会等、研修の場の充実に努めた。	A	A	・個性豊かな児童生徒にとって、一人ひとりに合ったコミュニケーションづくりは大切です。反面、ことばの使い方によっては、誤解をされてしまう事もあり学年・学部での共有を続けてほしい。 ・保護者の評価も上昇していることは嬉しいですし成果が認められているのだと思う。 ・保護者との共有の機会を充実させていきたい。 ・発達段階や認知、コミュニケーション方法などで丁寧に実態を把握し、指導されていると思います。特に、自閉症の子供へのアプローチがいいと思われる。
専門性①	新学習指導要領に沿った 12 年間のつながりのある教育課程を実施する。	実践の成果を共有し、次年度に向けてカリキュラム・マネジメントシートとシラバスの見直し改善を 12 年間のつながりの視点で行い、教員間で共通理解をした。	A	A	・小学部入学からの 12 年間が切れ目なく、成長の過程を共有していただけると嬉しい。 ・カリキュラム・マネジメントの意義と意味を共有することは難しいと思いますが、学年主任、教務主任、カリキュラム担当、研修課等の先生方を中心に。職員の皆さんがとても有意義な取り組みをしていると思われる。
		シラバスの達成に必要な教材教具を整えた。	B	B	・開校 3 年目であり、授業を重ねる中でまだ必要な教材教具があり、優先順位も大切ですが予算確保に努めたい。 ・職員に負担をかけないよう既成の教材で可能な物品は購入してほしい。 ・予算内での購入は仕方ない。必要な教材をしっかりと検討していただいていることを評価する。 ・教材教具は、そろそろ、整えたいところですね。先生方の自己努力によるところも多い印象を受ける。
専門性②	児童生徒の適切な実態把握と課題設定により、確かな学びを積み上げる国語・算数（数学）の授業実践力の向上を図る。	ラーニングマップによる児童生徒の学習状況の評価を年間 3 回行い、国語・算数・数学の授業で、児童生徒が何を学んだのかを明らかにした。	A	A	・授業公開は、職員さん一人ひとりの資質向上繋がります。良い点を伸ばしモチベーションアップに努めてほしい。 ・研修課を中心に、一人一人の先生方が、とても丁寧に実践されていると思います。特に学習評価の取り組みによる専門性の向上や、教科別の指導の授業づくり（単元設定、教材開発、協働的な学び・・・等）では、全国的にも有数の実践だと思われる。
専門性③	将来の生活を豊かにするためのキャリア教育のあり方	全職員が、なぎのはプランを共有し、キャリアの視点で見直す事ができた。			・社会や進路先が多様化しており、学校（教職員）と各事業所と顔の見える関係を築くことにより、児童生徒に合った将来像を模索してほしい。

	を考える。	教職員向け進路研修や高等部見学を実施した。	B	B	- 一人ひとりの将来を見据えて教育していく姿勢が大切。今後も視点を明確にできるように。 - 全職員の「なぎのはプラン」共有できたことは評価できる。 - 高等部・進路において情報提供等、難しいのだろうか。実施できた教員89%と他より低い理由は何かしりたい。 - キャリア教育については、進路指導等の経験の浅い先生が増えてきていることから、改めて、どのように支援をするのか、知的障害者の「生涯」「生き方」等について、専門性を高める機会が欲しいと感じる。
連携①	児童生徒の良さと本人・保護者の将来の願う姿を共有する個別の教育支援計画、個別の指導計画（以下、伊豆の国書式個別）に基づき、保護者・関係機関との連携を図る。	児童生徒の良さを学校と保護者で共有し、伸ばすことができた。 伊豆の国書式個別を保護者や関係機関との連携に活用した。	A	A	- 事業所の立場で、働きながら障がい特性及び性格に合った仕事を発見することが多々ある。 - 横のコミュニケーション（学校間）を活発にして行けたらと思います。児童生徒同士から刺激し合えることの方が学びと具体的な活動になるので、その動きを支えることを連携してできないだろうか。 - カリキュラム・マネジメントと一体化している個別の指導計画について、開校から年々、理解が深まって、先生方の子どもの見方や評価の視点、また、保護者との共通理解のツールとして、役割を果たしていると感じる。
連携②	積極的に地域と関わり、学校や児童生徒について、地域への理解啓発を図る。	地域資源を活用した学習を目的を意識して計画・実施した。	A	A	- 地域へのアプローチは、学校側から積極的に行っている姿が見え、引き続き行って下さい。一方、地域側が学校との連携が出来る雰囲気づくりが大切。 - 水と緑・魚・自然からいただいている命のつながりをもっと資源と教えても良いと思う。それは肉親や食べることでそのものとか五感で。地域の感受性の高い人たちを呼び起こすような人の気持ちの根源や生活の源のようなことを発信していけると協力してくれる人は外から増えてくると思う。
		ホームページ、学校だより、児童生徒の作品等で、情報発信をした。	A	A	- 専門の職員がいない中で、ホームページ等、情報発信のツールが多様化しており様々な取り組みをお願いしたい。 - 画像が鮮明で分かりやすいHPになった。 - HPでは、もう少し、リアルタイムで発信できると良いという印象。地域に理解啓発をする目的は、設立時と変わってきているのではないかな。

様式第 5 号

連携 ③	外部機関や有識者と連携し、社会の変化に合わせた学校の担う役割について考える。	学校運営協議会、就業促進協議会等を開催し、得られた助言や情報を、会議等で共有した。	A	A	・協議会以外でも、協力出来る事があれば協力していきたい。
チ ー ム 学 校 ①	教職員一人一人がやりがいをもち学校づくりへ参画する。	学年部会・学部会・分掌部会・主任会等で提案したり、提案について話し合ったりすることができた。	A	A	・一人一人がやりがい持つには、職場環境・良い人間関係が築けることが大切。 ・「発言や提案、話し合いをしやすい雰囲気づくり」ができたことは大いに評価したい。
		管理職との面談等で、自身が学校づくりで力を発揮したいことや、自分の得意分野を伝えることができた。	A	A	・一人一人がやりがい持つには、職場環境・良い人間関係が築けることが大切。 ・教職員も児童生徒も同じ人間です。よさや強みが認められ、やりがいと達成感がもてる職場づくりをお願いしたい。 ・学校ではなくクラスという単位を自由に表現できる環境を。作品作りやクリエイターのような先生たち（アーティスト）だと思う。